

ユネスコの心

水戸ユネスコ協会

1. 「ユネスコ」とは

英語名の教育・科学・文化の頭文字を集めた略称で国際連合教育科学文化機関といます。

2. 創立の背景

日本がしかけた第二次世界大戦では、2,600万人の貴い人命が犠牲となり、そして広島、長崎に投下された原子爆弾は、人類が人類を滅亡に導くという恐ろしさをまざまざと感じさせました。

第二次世界大戦中の1942年以来、ロンドンに亡命政府を置いていたヨーロッパの各国の文部大臣が集まり、大戦によって荒廃した教育の復興について話し合いを重ねました。

1945年11月16日、戦禍のなまなましいロンドンで開かれた文部大臣会議で「ユネスコ憲章」が採択され、翌年11月4日、ユネスコは国際連合の専門機関として発足しました。戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない”とのことばに始まる憲章には戦争の悲惨をくりかえしたくないという人びとの願いが結集されています。

3. ユネスコの事業

教育、科学、文化、コミュニケーションを通して各国民の協力を進め、世界平和と人類共通の福祉に貢献するという目的でおこなわれています。

ユネスコが設立されてからしばらくの間は、第二次世界大戦の経験から各国の誤解や偏見をとりのぞくための相互理解、交流、調査研究、教育の普及などが主な活動ですが、1960年前後から新しい独立国が多く加盟し、北と南の社会、経済の格差をなくすために、途上国の教育、科学、文化、コミュニケーションの発展に協力援助する事業が重視されてきました。最近のユネスコは世界各国の当面する新しい課題とした人権の保障、平和の強化、生涯教育、環境問題、青少年問題、文化政策、コミュニケーション政策、世界新国際秩序の樹立などと取りくんでいます。

加盟国は158ヶ国、準加盟国は1ヶ国、事務局はパリーにあります。日本は1951年7月2日に60番目の国として加盟し翌年に「ユネスコ活動に関する法律を制定」国、

公共団体のユネスコ活動の役割などを定めています。

4. ユネスコとの出会い

私は、戦前埼玉で10年、戦後茨城で14年間、小・中学校の教壇に立ちました。定年退職して、心身共に開放された時、年金をもらって悠々自適それでよいのかとの問いが私の心の中にありました。長い間の経験を生かして子供達のために役立つことを考え、わが家の玄関を開放して「わかば文庫」を開設しました。赤塚地区は文化施設が一つもない非文化地帯なのです。市立図書館に本を借りに行きました。図書館には古本ばかりが多くて、「これを借してください」とは言えませんでした。県立図書館に行きました。ここも同様に薄暗い館内には古書ばかりが眠っていました。100冊のうち新本は5冊だけでした。仕方なく実費を投じて新本100冊を購入して文庫の体裁を整えました。

文庫開設2年目に日本ユネスコ協会連盟から「ユネスコライブラリ100」が贈呈されました。手垢つかずの新本を手にして思わず嬉し涙が出ました。子供達とむさぼる様に読みました。その中の一冊「ふるさとのカンボジアは遠くー戦禍の中の小さな画家たちー」が私の心を揺さぶりました。この本は国連高等弁務官事務所と日本ユネスコ協会連盟の共催でカンボジアの難民キャンプの中で行われた絵のコンテストに応募した5才～15才までの子供のメッセージとを集めたものでした。家を追われ、両親を殺され、強制労働と飢えとの闘いの中で恐怖におののく子供達の平和を求める血の叫びの収録でした。生まれて初めてクレヨンを持って書いたものです。強いショックを受けた私の全身は硬直し、やがて火の様に熱くなりました。この子たちを救う手だてはユネスコ以外にないと知り、水戸にユネスコ協会をつくろうと決意して市の教育長に協力をお願いに行きましたが何の反応もありませんでした。自分でやるよりほかないと悟って、東奔西走、同志73名を集めるのに4ヶ月かかりました。当時ユネスコを理解できる人は僅かでした。水戸ユネスコ協会は全く草の根の運動によって誕生したのです。

5. 水戸ユネスコ協会の組織と活動

青年部、国際交流部、文化部、人権平和部、開発教育部、緑の保護部、コアアクション研究部、国際理解少年少女教室部、広報部から成り、各専門部が独自に計画を立て相互理解の元で連携して活力あるものになっています。青年部は、或るときは協会の手足となり、或る時は独自のプランで青年部ならでの活動を実施しています。

6. 各専門部の実践活動

国際交流部－茨大の留学生と小学生との交流（学校行事、遠足等）により異文化の理解を深める等。文化部－絵画彫刻、お能などの鑑賞により教養を高める。人権平和部－国会見学、朝鮮学校との交流により政治とのつながりを認識しました。開発教育部－「戦争と青春」などの上映に一役かって（資金10万円を投資）平和の貴さを訴える。緑の保護部－つくばの森林公園に杉の苗木を植えたり、西部図書館の庭にソメイヨシノの桜の苗木3本を献木して環境の美化に努める。コーアクション研究部－街頭募金及び会員の善意により募金を途上国の識字運動の推進のため役立たせる。広報部－年4回「ユネスコだより」を発行し、会の動静を伝えています。

米、英に留学した松村教授（副会長）は両国の文化を紹介し、種田（副会長、参議院議員）はバングラデシュ救済事業として現地に教育基金制度を発足させ（一口50万）現在5口を設置、その拡大に努めています。（一口50万円の利子で13名の子供が就学できます。）

水戸ユネスコ協会は研修のために左の講師の方から指導をいただきました。

記

1. 沼田 真（自然環境協会理事長）
「世界の森林破壊を救え」
2. ルーベン・アビト（上智大学講師）
「アジアの現実と日本の課題」
3. 広長 敬太郎（元国連ユネスコ大使）
「発展途上国との共存と国際協力」
4. 鈴木 佑司（法政大学教授）
「第三世界の政治と平和」
5. 栗野 鳳（日本平和学会会長）
「平和と開発を考える」
6. アンセルモマタイス（上智大学副学長）
「今こそ生活の見直しが必要」
7. 田村 正人（朝日新聞本社記者）
「アフリカの飢餓と緑」
8. 上田 康一（世界ユネスコクラブ協会連盟副会長）
「ユネスコ創立－現状の分析－将来の展望」

9. 鈴木 佑司 (法政大学教授)
「世界平和の展望と日本の役割」
10. 松井 やより (朝日新聞本社記者)
「アジアの女性と日本社会との関係」
11. 村井 吉敬 (上智大学教授)
「アジアと私たちの援助について考える」
12. 石神 澄子 (日本ユネスコ協会連盟国際部長)
「国際識字年に向けて」
13. 周東 一也 (日本文化厚生財団医学資料館長)
「国際協力、援助、地域からの発進」
14. 山口 真 (流通経済大学教授)
「すべての人に文字を」

93・12・16日 記.

国際交流部

水戸ユネスコでは、設立当初から、ユネスコ憲章の「世界的、地球的規模でものごとを考え、行動する」をモットーに、地域性に合った活動を会員が知恵を出し合い、国際交流の活動を行ってきた。

その主な、今までの活動を列記してみよう。

1. 外国人研究者、学生、その他民間のユネスコ会員の人達のホームステイ、あるいは研修のための資金援助、研修のサポート等々。
今まで、これらに関係した国の出身者は、主に、ドイツ、アメリカ、フィリピン、ネパール、バングラデシュ、マレーシア、中国。
2. 外国人を講師に迎えての国際理解のための講演会。
これらの講師には、勿論、日本人ユネスコの理事の専門家の諸氏を初め、各方面の専門家、大学の教授(外国人含む)、あるいは地域在住の外国人留学生などを招いての、時の声、専門家のご意見、日本人に対する意見など、特定の枠にとらわれることなく、会員がその年、その時の世相に反映する声などを主に取りあげ、お話を聞く会である。

3. 地域に在住の外国人を招いての国際交流パーティー。これは、水戸ユネスコが一年に一度、最も力を入れている国際交流事業の一つである。ゲストには、会員と親しい関係にある外国人を始め、茨城大学の留学生、近郊に在住の外国人など様々。

この会は、外国の人達と一緒に料理を食べながら気楽に交流をしようという趣旨で行っている。このパーティーは、特別の場合を除き、主に会員が手作りのお料理でもてなす。

そして、外国のお客様にも、時にはそれぞれの国のお料理を持って来ていただいたり、一緒に作ったりすることもある。

このパーティーはいつも盛況である。やはり、食べるという事においては、国境は関係ない様である。

4. 国際理解を深めるための、国際理解少年少女教室、これは、七年前から、水戸市内の小学校を対象に、茨城大学に留学している外国人学生と小学生が相互に異文化の理解を深めるための交流教室として始められた。

この事業は、水戸市教育委員会と水戸ユネスコ協会が、協力し毎年計画を実施している。

市内の四校（平均）が主に年に一、二度、留学生が各小学校を訪れ、各学校独自に計画された、遠足、運動会、秋の収穫祭（主に水戸市内の各校ではさつまいも）、地域の三世代交流、学級交流、全校生との交流など様々な形の交流教室。

当初、この計画が始められた頃には、児童達は、金髪で青い目で英語を話してくれる人が来てくれると思った。あるいは、英語がペラペラの人かと思ったなど、多少児童達の間には外国人というイメージがどうも、日本人の固定観念の中のにあった様に思う。

だから、アジア、特に中国、マレーシアの学生が訪問した時には、一応に、日本人と何ら、外見では違いが見つけれない彼らを見た時には、戸惑った様だ。

しかし、逆に、留学生側は、児童達から、その様な目でしか見られないということに、半ばショックの色を隠せないといった学生も居た。このことは、毎年、この教室の終了後に、児童や、留学生からそれぞれ何人かに感想を書いてもらい、報告書として作成しているが、その中には、児童や留学生が感じとったまゝの素直な感想が書かれており、貴重な資料である。

その感想の中から、いくつか、児童や学生がどの様に書いているかを上

げてみよう。

小学生の感想

- ・ 日本語が上手なのでびっくりした。
- ・ 自分たちのお姉さんやお兄さん達のように思えた。
- ・ 留学生と交流して、アジアの国の人達が身近かに感じられる様になった。
- ・ 又、留学生に、学校に来てもらいたい。
- ・ 大人になったら世界の人々と仲良くしたいと思った。
- ・ 戦争を二度と起こさない平和な国にしたいと思った。

留学生の感想

- ・ 子供達と交流をすることによって、日本人の理解の一助にできた。
- ・ 日本語をみがく為に、とても良い機会だ。
- ・ 日本の習慣、文化などを理解するのに役立った。
- ・ 子供達の素直な気持に心打たれた。

以上、まだまだ、いろいろ上げられるがこれは、又、別の機会に詳しく、述べることにする。

5. その他

(イ)、国際交流促進のために、会員仲間同士、英会話学習。

このグループは、女性のみであったが、学習しながら、実践として、外国人の日常生活で困っていることの相談や通訳としても活動した。現在は、英会話クラスは休講中。

(ロ)、日本語ボランティア

茨城大学の留学生に、ユネスコ会員が個別的に要請のあった学生に対して、ボランティアとして日本語の指導を行っている。

入学して間もない学生は、日本語が完全と言いきれない人もおり、その様な学生に、特別の時間を作らなくても、いろいろの場所で折にふれて、彼らに日本人とのコミュニケーションの場を設けてやることにより、多くの人から彼らは彼らなりに普段の日本人との会話の機会を増やすことはできると思う。

今後は、ユネスコとして、留学生に対してもっと、その為に力を貸してやれないものか検討の余地がある。

以上、国際交流部として行ってきた過去12年間の活動を大まかにまとめてみた。

現在までの活動を通じて、将来どの様に進めて行ったら良いかを書いておこう。
水戸ユネスコとしては、毎月、一回定例会を開き、毎回、各種行事、計画等を話し合い勸めている。

前記した様な形式で、いろいろな行事を行っているが、大きなパーティーなどの場合には会員も大ぜい参加するが、定例会等に出席するメンバーはだいたい同じ顔ぶれが多い。一つ一つの活動すべてが会員の自発的な意思に基づき行われているため、いつもスムーズに進行しているものばかりではない。

百人を超える出席者が出ることもあったり、十数名で一つの行事が実施されることもある。

一般に、講演会や勉強会となると、その差は明らかである。

より多くの人に魅力ある活動をするためには、なるべくいろいろの分野の方々に世代を問わず参加してもらえる楽しい計画を実施していきたいと考えている。水戸ユネスコ協会は、他の国際ボランティア活動グループと比較して、ユニークなカラーであると思う。

十代から七十代まで年齢層も厚く、男性、女性の区別もなく、これらの人達が一つの会を組織し、活動しているところは、あまり例を見ないのではないだろうか。

活動の場は、それぞれ部毎によって異なるが、会員が一眼となって、ユネスコ精神の基で、おのおのが、自己向上をめざし、活躍できる素晴らしい会であると思う。

今後共、この会の利点を活かし、二十一世紀に向けて、飛躍出来る会にしていきたいと考える。又、会員の中核となるべき、若者がもっと多く参加してもらえる様な、ユニークな国際交流プログラムを、もっと考えて行きたいと考えている。

開 発 教 育 部

水戸ユネスコにおける開発教育は、ユネスコの教育・科学・文化、そしてコミュニケーションを通して世界の平和と人類の福祉社会の増進を目指すのによって、特に私たちと同じ身近なアジア圏を学び、学ぶことによって実行動に結びつけ、国際化時代にふさわしい日本人としての資質を高めたいと思っている。

初め、開発教育部は、最貧国の一つバングラデシュの理解部でスタートした。バングラデシュのダッカに駐在事務所を持つ東京のNGO、シャプラニールとの交流を始めて、徳永和理さんを講師に迎え、バングラデシュの宗教、政治的背景や毎

年繰り返される自然の脅威、サイクロン（超大型台風）、爆発的な人口増加（北海道くらいのところに日本の人口と同じ1億2千万台の人が住む）、識字率約25%、そして貧困を知った。しかし、ただ貧しいから、「かわいそう」「お金をあげる」ということではなく、現地の人と一緒に汗を流し、“自立のために援助をしていこう”という言葉は、当時、十二、三年前の茨城では珍しかった。安易な気持ちでアジアを見ないよう、一人ひとりの日本人もしっかりアジアを学ばなければいけないことを感じた。このころ日本は世界の中でも注目されるめざましい経済発展の上り坂で、国民は中流意識で有頂天であったように思う。その時、紹介された素朴な手工芸品を見て、日本人が忘れかけていたものがここにあると気づかされた。

こういうことがきっかけで、会員の馬上美恵子さんが、1983年に青年海外協力隊員としてバングラデシュに赴き、三年の間に現地から手紙が届き、会員にとっては刺激になった。彼女のたよりの中で光っていたのは、身をもって栄養指導など体験した中から、貧しい国・バングラデシュではなく、『讃歌』であった。そして、同じバングラデシュの地で知り合った夫君とともに、現在、日本バングラデシュ文化交流協会ロシュンを起こし、現地の女性たちの自立の手助けや、彼女自身もバングラデシュ料理研究者として東京、茨城を中心に活動している。又、国会へ進出した種田誠さんも、議員活動の中で超党派のユネスコ議員として、議員になる前から付き合いのあるバングラデシュの友人との交流を続け、さきの大統領選挙の監視要員として参加、民衆の動きなどもよくつかみ、現在は子供の教育のための日本・バングラデシュ友好教育基金を現地のダッカ大学の有識者らと創設し、子供たちの教育に力を注いでいる。二人の関係するプロジェクトには、水戸ユネスコとしても応援を続けている。

途中、アジアの理解部に改称されたが、1988年に、朝日新聞の松井やより編集委員を呼び、『アジアの女性と日本社会との関係』を聞き、松井さんのアジア総局長として18カ国を見て来られた目は確かで、説得力があり、それは衝撃的で、講演の中で、フィリピンのシスターの言葉から直接聞いた言葉で「アジアで苦しんでいる人たちが求めているのは、憐れみでもなく、嘆きでもなく、涙でもなく、ましてや祈りでもなく、怒りである。怒って、次は行動する」。目からウロコが落ちるようなすばらしい話であった。この後から、幾度か話の中に出てきた「開発教育」という言葉は、＜理解＞を一步進めた日本とアジアの関係をわかりやすくするキーワードであることを知り、開発教育部に名称を変えたといういきさつがある。

そして、水戸ユネスコ10周年を1991年に迎えたとき、一つの映画に出会う。映画は文化の担い手であり、積極的な平和を維持するためには強力なメディアでも

ある。茨城県にゆかりのある今井正監督（旧制水戸校）の映画「戦争と青春」を、開発教育部が中心になって、全国に呼びかけていた市民プロデューサーとして応募、一口10万円（市民や外国人50人が協力）を集め、さらにこの映画を一人でも多くの人に見せるために、水戸ユネスコだけで620枚、そして心強かったのは土浦、つくば、日立各ユネスコの賛同を得て茨城4ユネスコ協会が合計1,000枚のチケットの普及をした。ちょうど湾岸戦争の年の作品で、映画のメッセージは戦争のむなしさと平和の大切さを強調したもので、平和ぼけしていた日本に、戦争を知らない世代が多くなる今日、多くの人々の共感を呼んで、茨城では全国の中でも上位に入るほど観賞された。この映画の収益金の一部が湾岸戦争の犠牲となった子供たちの教育に日本ユネスコ連盟協会を通して届けられることが途中でわかった。水戸ユネスコの活動は、映画を鑑賞した同事務局の目にもとまり、10周年記念誌の祝いの言葉の中にその感動を寄せてくださった。続いて次の年、軍夫や従軍慰安婦をクローズアップしたドキュメンタリー映画「アリランの歌ーオキナワからの証言」水戸上映に企画の段階から協力参加して、来水された朴壽南（パクスナム）監督のトークをはさんで二回上映で九百人を超える市民の観賞があり、日本政府が初めて謝罪表明をしたのはこの日だった。私たちも在日コリアンたちの日本での厳しさを積極的に知り、民間としてできることを応援できたらと思う。

この10年の間には、世界に目を向けるための会員への啓発として、水戸ユネスコ全体では、中央から講師を呼んで、環境問題の森林伐採と世界の砂漠化、第三世界と日本の関係、エビと日本の関係など大局的な日本とアジアの関係を学んできたが、茨城大学の留学生や研究者、会員に、身近なところで話を聞くミニ講演会も何回か開いた。

フィリピンのG・エンリケス先生には、マルコス大統領からコリー・アキノに交代する歴史的な選挙での女性たちの積極的な活動を聞くことができた。台湾の学生からは、茨城での教育実習や日本での生活について、韓国の学生には日本と韓国の女流作家の比較と、樋口一葉を研究している話に感激したり、マレーシアの学生には、ココナツミルク入りの料理の実習。そして、シャプラニールが招聘した途上国の識字運動のために来日したホスナラ・ミヌーさんらとの懇談と県民へのアピールなどに協力、会員の馬上さんには、バングラデシュの理解と協力のための講演をスライドと食を通して、市民に呼びかけた。アンケートでは参加してよかったという声が多く、もっともっとこういう機会をつくるべきだと思っている。韓国政府派遣の水戸駐在の白奉鉉（ペクボンヒョン）先生には、日本での年半の滞在（1991年2月帰国）の間にせっせと日本全国を旅行した楽しかった話と、途中で車が故障してしまい、困っていたら、親切に面倒を見てくれて、こんなす

ばらしい国はないと、心からほめてくださった。

今後は、識字教育などユネスコらしいコー・アクション（協力して行動する）を原点に、世界寺小屋運動募金、水戸においては「やさしさの100円＝水戸寺小屋募金」など三つの募金活動を進めるため参加者が意見交換できる勉強会や外国語の学習、アジアへの研修旅行、現地の人たちと一緒にできることを行動に移すことなど一歩進めたものと、地域で交流した外国の人たちともっと心を交わすために文通など気楽な交流も大事にしたい。

最後に、日本から世界へ広めたこの民間ユネスコ運動は、茨城の中では歴史の浅い活動ではあるが、1990年に水戸ユネスコの講演に来られた流通経済大学の山口真教授が言われた「私はユネスコが大好きです」というくらい自信が持てるよう、そして生涯学習を提唱したユネスコの精神を地域に広め、「日本人は嫌い」といつまでも言われないように、終戦後、ユニセフやユネスコの大きな愛が日本の子供たちに向けられたことに感謝し、これからも身近なアジアに関心を持って、真の友人になれるよう努めていきたい。

ユネスコ青年部活動

水戸ユネスコ協会青年部は、1984年5月13日に設立されました。親協会よりも約2年半遅く出発したわけですが、青年部設立のきっかけというのは、当時ユネスコ協会の中でエネルギーを持て余し気味でいた高校生や大学生などの次のような思いでした。

それは、すでに彼らは日本青年ユネスコ連絡協議会（日青ユ協）が開催している国際子どもキャンプに参加して、カウンセラーや本部員として活躍していた者も多く、他協会の刺激も受けており、親協会の活動への参加だけでは物足りないという気持ちでいたようでした。青年期の「何でも挑戦してみたい」という気持ちが強く、その場を青年部に求めてきたのではないかと思います。

設立当初は、月一回の定例会を映画上映とミーティングという形で取り組みを行いました。その後は、テーマごとの学習会を行ってきましたが、年々参加者が減少してしまいました。

除々に活動が停滞していく中、日青ユ協から水戸で国際子どもキャンプを開催してほしいとの要請がありました。

たまたまその年は、水戸市政百周年で「地元の協力も得やすいこともあり、会長からも是非引き受けるようにとハッパをかけられ、ついに大役を引き受けるこ

とになりました。

1989年8月5～8日、水戸市少年自然の家で国際子どもキャンプが総勢250名の参加で開催されました。

開催するまでには、事前研修やウォークラリーの下見、打合せ、資料作り、買い出し、案内など大変な苦勞がありました。青年部の総力と親協会の協力を受けて、台風の直撃にも負けず、無事成功することができました。

ところが、このキャンプを境目に青年部活動が低迷して今日までに至っております。実は、このキャンプを実施する頃は既に活動が停滞気味でしたが、必死の努力で何とかキャンプの形を整えることができたというのが実態でした。

それは、当初から部員が一堂に会する機会が少なかったこともあります。学生には学業・受験があり、アルバイトをしている人もいます。さらに就職して水戸を離れる者、結婚して家庭をもつ者というように多勢でまとまって活動することがますます困難になってしまいました。もちろん、新部員もこの間に入ってはきているのですが、うまくいきませんでした。

いつのまにか、定例会を行っても2、3人しか集まらないことが続き、現在はその定例会も開かれていない状況です。

このような状況だからこそ、原点に立ち返って活動をしていかなければならないわけですが、あまり堅い内容から再開しても長続きしないので、部員が集まりやすい場を設定し、レクリエーションを取り入れるなどして、ざっくばらんな意見を交換するところから会を運営していこうと考えています。

あとがき

ボランティアとは、無理をせず一人一人が自分の活動出来る範囲内で、社会に奉仕することで、追いつけではない。

小さい事でも、少しずつ皆が力を合わせて、何かやることは意義深いと考える。

そして、これらの一つ一つの活動を通じて会員同志、心と心のふれ合いを増やすことにより私達個人も人間として、とても大事な事ではないだろうか。

ある時は、我慢、ある時は忍耐、ある時は寛容にと、人とのふれあいはその大切さを教えて呉れている様な気がする。

何もやらずしては、何も得られないと同じである。楽しい事も辛い事もある。しかし、これはどんな事にもつきものであるろうし、楽しい事もあるから、辛さに耐え、そして次の目標に向かい活動出来るのだと思う。

日頃の活動の中には、一般会員に計り知れない程会を支えている中心的メンバーには苦勞がある。

しかし、これらのメンバーは設立当初から初代会長をサポートし、二代目会長へとバトンタッチした。十年以上も皆、頑張っでこれら種々の活動が出来るのも、それぞれ、お互いに思いやりと助け合いと優しい心を持ち、ユネスコをよりよくしようと言う表れと思う。